

修士論文

実践コミュニティ設計テンプレートによる 継続的な学習コミュニティ運用の再設計

Redesigning Continuous Learning Community Operations with the
Community of Practice Design Template

熊本大学大学院社会文化科学教育部 教授システム学専攻 博士前期課程

200-G8811

長山 琢磨

主指導：合田 美子 准教授

副指導：鈴木 克明 教授

副指導：喜多 敏博 教授

2022年1月

目次

要旨（日本語）	1
要旨（英語）	2
第1章 研究の概要	3
1.1. 研究の背景	3
1.2. 研究の目的	3
第2章 先行研究の整理	6
2.1. 実践コミュニティ	6
2.2. オンラインコミュニティ	6
2.3. 高等教育における実践コミュニティの先行研究	6
第3章 研究の方法	8
3.1. 質的研究による半構造化インタビュー	8
3.2. 研究対象者	8
第4章 解決方針の検討	10
4.1. J-QA 研究会の実践コミュニティ化に向けた検討	10
4.2. 実践コミュニティ設計テンプレートの適用	11
第5章 実践	12
5.1. テンプレートに基づくコミュニティの再設計	12
5.2. 副次的効果としてのナレッジ生成	14
第6章 実験評価	16
第7章 考察	17
7.1. 半構造化インタビューの分析	17
7.2. 今後の展望と課題	19
参考文献	21
添付資料	22
資料 1.1. 実践コミュニティ設計テンプレート	22
資料 1.2. J-QA 研究会の実践コミュニティ設計テンプレート	22
資料 2 質的調査の協力依頼	23
資料 3 質的調査の協力者への同意書	24
資料 4 実践コミュニティ設計テンプレートの適用前後の変化に関するインタビュー項目 ...	25
資料 5 「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方	27

要旨（日本語）

1. 研究でやったこと

権藤,合田（2013）による「実践コミュニティ設計テンプレート」に基づき、2020 年 9 月から実践していた大学教職員 5 名で構成される「大学教育の質保証研究会（J-QA 研究会）」を実践コミュニティに再設計した。再設計後のコミュニティでは、参加者の経験に基づく大学設置認可申請のナレッジ生成と改訂を行った。

2. 成果

実践コミュニティ設計テンプレートの作成過程において、明文化されたコミュニティの目標等を議論した結果、行うべき目標・メンバー間の役割が整理され、正統な実践コミュニティへの転換を行うことができた。

また、その副次的効果として「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方を解説するナレッジを生成し、公表することに繋がった。

再設計後のコミュニティにより、参加者がナレッジの生成と改訂を繰り返しながら成長を実感できるような継続的なコミュニティの運用が可能となった。

3. 特徴

実践コミュニティ設計テンプレートの有用性を検証し、大学設置認可申請のナレッジ生成と改訂を構造化した。

要旨（英語）

1. What we did in our research

Based on the "Template for Designing Communities of Practice" by Gondo and Goda (2013), we redesigned the Study Group for Quality Assurance of University Education (J-QA Study Group), which consisted of five university faculty members who had been practicing since September 2020, into a community of practice. In the redesigned community, knowledge generation and revision of the application for approval of university establishment based on the participants' experiences were conducted.

2. Results

In the process of creating the design template for the community of practice, we discussed the goals of the community, which were clearly stated, and as a result, we were able to organize the goals to be performed and the roles among the members, and to transform the community into a legitimate community of practice.

As a side effect, it also led to the generation and publication of knowledge that explains how to read the "Guide to Preparing Documents for the Establishment of Universities".

The redesigned community made it possible to operate a continuous community in which participants can experience growth through repeated generation and revision of knowledge.

3. Characteristics

The usefulness of the community of practice design template was verified, and the knowledge generation and revision of the application for approval of university establishment was structured.

第1章 研究の概要

1.1. 研究の背景

筆者は2020年9月に大学教育の質保証研究会（以下「J-QA研究会」という。）を立ち上げた。この研究会は大学教育の質保証システムである大学設置認可制度、認証評価及び内部質保証に業務として関わった経験を持つ大学の教職員が、各自の経験に基づく実践知を共有し、公の知識としてすることを目的としている。

我が国の大学教育の質保証システムは、大学設置認可制度並びに認証評価及び内部質保証の3点から構成される。本研究では、大学設置基準に基づくピアレビューのもとに教育プログラムが認可される我が国の高等教育の質保証を支える根幹的制度ともいえる「大学設置認可制度」を研究対象とする。当制度は1947年度の学制改革により制度化され、直近5か年の公私立大学の設置認可申請及び届出の件数は平均で約131件と、質保証システムの一翼を担う重要な制度である。

大学設置認可申請は行政手続型のプロジェクト業務である。文部科学省によって示されている「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」（以下「設置の手引」という。）は約400ページの資料であり、文部科学省と申請側の担当者との個別のやり取りの経験に依拠する面が大きい。

このため、初めて大学設置認可申請を担当する場合に何から着手すれば良いのか分かりにくい。また、小規模大学は組織として大学設置認可申請を行うタイミングが毎年あるわけではなく、ナレッジの継承が難しい。過去には書籍等で有用なナレッジが生成されているが、制度の細部が毎年変わるため、持続的なナレッジ・マネジメントが必要である。

1.2. 研究の目的

2020年9月に国立大学職員1名、公立大学職員1名、私立大学職員2名、私立大学専任教員1名の合計5名で構成される「大学教育の質保証研究会（J-QA研究会）」を立ち上げた。いずれのメンバーも大学設置認可申請の業務経験を有している。

構成員は関東地区及び東北地区に在住しており、月1回の研究会はZoomで実施し、メンバーが持ち回りで大学教育の質保証に関連する内容を発表・意見交換している。また、日常的なメンバー間の意見交換にはSlackを活用している。Zoomでの研究会は毎回レコーディングを行って記録化するとともに、Amazon Transcribeを活用してテキストデータを自動的に生成することで、ナレッジが積み重ねられるようにしている。



図1 J-QA 研究会の Slack

2020 年 9 月から 2021 年 12 月時点までに 12 回の研究会を実施した。各回のテーマは表 1 のとおりである。

表 1 J-QA 研究会開催一覧

回	実施日	テーマ
1	2020/09/24	設置不認可
2	2020/10/20	公立大学の設置認可
3	2020/11/24	私立大学の設置認可
4	2020/12/21	学校法人の設置認可
5	2021/01/20	設置駆け込み寺（専攻科の設置、収容定員変更など）
6	2021/02/18	国立大学法人評価
7	2021/03/16	ゲスト回（国立大学における質保証の取組み）
8	2021/04/29	私立大学と認証評価
9	2021/05/28	J-QA 研究会の実践コミュニティ化に向けた意見交換
10	2021/06/25	ゲスト回（専門職大学の設置認可）
11	2021/09/13	国立大学の機関別認証評価
12	2021/10/25	教職課程の質保証

設計テンプレートに基づく再設計を行った結果、コミュニティ内の役割分担が明確化し、ナレッジ生成と改訂がよりスムーズに行われるようになった。

本研究では、筆者が運営する大学設置認可を含むオンラインコミュニティを設計テンプレートで再設計した効果検証と学習コミュニティ運用が転換したプロセスを明らかにすることを試みる。

第2章 先行研究の整理

2.1. 実践コミュニティ

実践コミュニティとは、Wenger et al. (2002) によって提唱された「共通の専門スキルや、ある事業へのコミットメントによって非公式に結びついた人々の集まり」である。

筆者は、J-QA 研究会は大学設置認可申請の経験（専門スキル）を有する大学の教職員が、大学設置認可申請に関する事務的な面での共通知（ある事業へのコミットメント）を持っていると解し、研究会を継続させ、実践的なナレッジの生成と共有が図られるためには、理論的背景に基づく設計が必要であると考えた。

松本（2018）は、実践共同体における非規範的視点と越境が学習を促進することを指摘しており、越境が学習を促進する点はオンラインコミュニティにも適用可能と思われる。

権藤,合田（2013）は、実践コミュニティの有用性を評価しつつ、実践コミュニティを企画し、デザインできるようにするためのツールの研究が進んでいないことに着目し、実践コミュニティ設計テンプレート（以下「設計テンプレート」という。）を開発した。

2.2. オンラインコミュニティ

清水（2018）は、Canadian Association of Medical Radiation Technologists におけるオンラインコミュニティのフィールド調査を実施し、オンラインコミュニティの形成から成長までの一連のプロセスを分析した。この事例研究を通じて、コミュニティの成長段階に応じて創発的行動と組織的設計を折衷的に使い分けることで、コミュニティ形成が駆動することを指摘している。この研究内容に照らすと、設計テンプレートを適用する以前の J-QA 研究会は創発的行動の段階であったと考えられる。

創発的行動と組織的設計を連鎖させることによってオンラインコミュニティ運営が駆動する点は、先に挙げた権藤,合田（2013）がテンプレートの対象範囲を実践コミュニティの初期段階としたこととも関連する。設計テンプレートの有用性を検証し、より広く活用を促すことが、本研究の成果になると考えた。

2.3. 高等教育における実践コミュニティの先行研究

長田 et al. (2021) は、多様な教員による教育実践コミュニティの働きや活動を通じた教員の経験を記述するパターン・ランゲージの試行的開発の過程と結果を検討し、開発活

動を通じてコミュニティへの理解が深まること、越境的な教育実践コミュニティが高等教育の質保証に有効であることを指摘した。

井上 et al. (2021) は、SoTL (Scholarship of Teaching and Learning : 「教員による授業実践に関する学術的探求を通して、教授・学習過程を改善する取組み」) における実践コミュニティの意義と課題を検討し、多様な立場から教育・研究について日常的に議論や情報共有ができる環境づくりと組織風土の構築が重要であることを指摘した。

本研究の射程である J-QA 研究会も高等教育の質保証を志向したものである。筆者は今後高等教育における実践コミュニティの活用はさらに深化すると考えた。そのため、結成段階から正統な実践コミュニティ設計のデザイン・テンプレートが広く用いられるための検証には、取り組むべき意義があると考ええる。

第3章 研究の方法

3.1. 質的研究による半構造化インタビュー

本研究では、権藤,合田（2013）による設計テンプレートのフレームワークを用いてコミュニティの見直しと実践コミュニティの再設計を行う。

入口を設計テンプレート適用前の J-QA 研究会を設定し、出口を再設計後の J-QA 研究会に設定する。設計テンプレートによる再設計（介入）によって、コミュニティがどのように変容し、ナレッジの生成に繋がったのかを調査するため、研究会メンバーに半構造化インタビューを行う。半構造化インタビューは Zoom によるオンラインで実施し、録画データと Amazon Transcribe によるテキストデータの自動生成によって得られるインタビュー結果を踏まえて、分析を行う。

半構造化インタビューの実施にあたっては、[資料 2「質的調査の協力依頼」](#)に基づき、予め研究の目的を文書で説明する。併せて、[資料 3「質的調査の協力者への同意書」](#)によって、インタビュー内容を研究目的にのみ用いる同意書を取得する。

本研究での質的調査手法として「ナラティブ分析」を採用し、インタビューは、[資料 4「実践コミュニティ設計テンプレートの適用前後の変化に関するインタビュー項目」](#)に基づき、Zoom によるオンライン形式で実施する。インタビューでは、設計テンプレートの適用による J-QA 研究会における変化の有無、再設計後のコミュニティ自体の成長度合い、J-QA 研究会を通じた実践コミュニティへの参画でのインタビュー自身の成長実感、「結託段階における基本計画」で掲げた目標の達成度を調査する。

インタビュー終了後、録画データと Amazon Transcribe によるテキストデータの自動生成によって得られるインタビュー結果を元に逐語録を作成し、設計テンプレートの適用前後のコミュニティ変容について各自の語りを分析する。

3.2. 研究対象者

本研究で対象とするのは、J-QA 研究会の立ち上げから参画している 4 名の大学教職員である。各人の属性は私立大学教員 1 名（A 氏）、国立大学法人職員 1 名、公立大学法人職員 1 名、私立大学職員 1 名の計 4 名である。

J-QA 研究会は、筆者が四国地区大学教職員能力開発ネットワークの大学教職員向け研修である SPOD フォーラム 2019「大学設置認可申請入門」の講師を担当したことをきっかけに立ち上げた。全員が大学設置認可申請の業務経験を有し、現在も大学設置認可申

請、認証評価、内部質保証及び国立大学法人評価に関係している。このため、J-QA 研究会では各自の業務経験に基づく課題設定を行い、毎回の研究会で大学教育の質保証に関する発表を行う形式で行ってきた。

研究対象者のコミュニティ内での役割分担は以下のとおりである。

- コーディネーター：筆者と私立大学教員の A 氏
- 思考リーダー：筆者と私立大学教員の A 氏
- コアメンバー：筆者と私立大学職員の B 氏、国立大学職員の D 氏、公立大学職員の C 氏

第4章 解決方針の検討

4.1. J-QA 研究会の実践コミュニティ化に向けた検討

J-QA 研究会の 2020 年 9 月の創設当初、月 1 回開催としてコミュニティメンバーがこれまでの大学設置認可申請で感じた課題を各回でテーマを決めて共有化していくスタイルを採用していた。

筆者は J-QA 研究会を運営する途上で、研究会のメンバーは全員が大学設置認可申請の経験を有する教職員であったため、実践コミュニティとしての運用が可能なのではないかと考えた。Wenger et al. (2002) による実践コミュニティ育成には以下に示す 7 つの原則がある。

- (1) 進化を前提とした設計を行う
- (2) 内部と外部それぞれの視点を取り入れる
- (3) さまざまなレベルの参加を奨励する
- (4) 公と私それぞれのコミュニティ空間を作る
- (5) 価値に焦点を当てる
- (6) 親近感と刺激を組み合わせる
- (7) コミュニティのリズムを生み出す

7 つの原則を適用するためには、コミュニティの設計段階からのアプローチが必要であることが分かった。しかしながら、この時点では実践コミュニティが有する特徴については理解していたが、既に運用している J-QA 研究会を正統な実践コミュニティに移行させるための方法は思い付かなかった。

また、J-QA 研究会は各自が別々の職場で勤めている社会人のコミュニティであること、新型コロナウイルス感染症の影響で対面での研究会実施が難しいことから、Zoom を活用したオンライン実施であった。このため、オンラインコミュニティの設計についての先行研究として清水 (2018) に注目し、コミュニティ運営を駆動させるための条件として、創発的行動と組織的設計を連鎖させることが重要であること、理論的背景に基づくコミュニティ設計の観点において、初期段階と成熟段階で発展していく実践コミュニティとの共通性があることについて理解を深めた。

4.2. 実践コミュニティ設計テンプレートの適用

実践コミュニティについての先行研究サーベイで、権藤,合田（2013）による実践コミュニティの設計を支援するテンプレートが開発されていることを発見した。このテンプレートは正統な実践コミュニティの設計を支援するためのテンプレート開発を意図したものであり、J-QA 研究会を実践コミュニティに再設計するにあたって活用を試みた。

Wenger et al.（2002）は、実践コミュニティ発展過程の 5 段階（第 1 段階：潜在、第 2 段階：結託、第 3 段階：成熟、第 4 段階：維持・向上、第 5 段階：変容）のうち、第 2 段階までを初期段階、第 3 段階以降を成熟段階と分類している。設計テンプレートはコミュニティ創設段階に焦点化したものである

また、清水（2018）が指摘するように、オンラインコミュニティ運営を駆動させるためには創発的行動と組織的設計の連鎖が重要であることから、J-QA 研究会を設計テンプレートで再設計するにあたって、創発的行動が促される仕掛けが必要だと解釈した。

以上のように、設計テンプレートが初期段階での実践コミュニティ設計を意図していること、オンラインコミュニティの運営を駆動させるために、創発的行動と組織的設計を連鎖させるにあたり、J-QA 研究会は創設後 1 年未満のコミュニティであったため、設計テンプレートの適用による実践コミュニティ化が可能であると判断した。

第5章 実践

5.1. テンプレートに基づくコミュニティの再設計

榎藤，合田（2013）の研究成果であるテンプレートのイメージを参考に、筆者が Microsoft PowerPoint でテンプレート用のデータを作成した。

テンプレートは以下の4項目から構成されるマトリックスである。各項目は Wenger et al.（2002）の実践コミュニティ育成の7つの原則に基づき、予め記述すべき項目が設定されている。筆者が[資料1-1の設計テンプレート](#)に基づき、叩き台のデータを作成した。

設計テンプレートの作成とコミュニティ内での共有にあたっては、メンバーの私立大学教員 A 氏に協力を仰ぎ、筆者が作成した叩き台についての形成的評価を受けた。A 氏は本研究会の立ち上げから関わっており、筆者がコミュニティ運営について相談する立場であったため、メンバーの役割分担についてのアドバイスを受けた。

以上の形成的評価を踏まえて、[資料1-2のJ-QA研究会のテンプレート](#)を完成させた。

（1） 基本情報とコンセプト

基本情報とコンセプトの作成にあたって、設計テンプレートのマトリックス上で項目として設定されていた「役割」「知識共有プロセス」「インタビュー計画」については別途記述できる箇所があるため、本項目からは除外し、活動範囲として大学教育の質保証に関わる業務の担当経験がある職員を対象とすることを追記した。

- コミュニティ名：J-QA 研究会
- 領域：教育学分野のうち、高等教育学分野で、大学教育実践に関わる領域
- テーマ：日本の大学教育の質保証システム（大学設置認可制度、認証評価、内部質保証）※メンバー間の得意分野で分担
- 分類 助け合い / ベスト・プラクティス 知識の世話人 / イノベーション
- 活動範囲：設置認可申請、認証評価、内部質保証の担当経験がある大学職員

（2） 組織内コミュニティ設立の場合の提案資料

本項目は組織内コミュニティ設立時の提案資料として項目が設定されていたが、J-QA 研究会は複数の大学教職員で構成される組織横断的コミュニティであるため、高等教育に関わる組織等全般に対しての提案資料として作成した。

- 解決すべき組織の問題：横断的ネットワークが存在しない大学設置認可申請担当者のコミュニティを創設し、各大学に閉じているナレッジを共有化する。

- コミュニティの意義：大学設置認可申請の経験・スキルを実践コミュニティで大学横断的に共有化
- このコミュニティが組織にもたらす価値：前任者や大学設置コンサルティング業者などからしか得られなかった「経験しないと分からない」大学設置認可申請の業務について、他大学での経験を持ち寄った職員間で率直な意見交換ができる。
- 支援すべき根拠：各大学で閉じている設置認可申請業務のナレッジを共有化することにより、申請者と審査側の事務的負担を軽減し、真に教育の質保証に繋がる時間を確保する。

(3) メンバー

役割分担として、コーディネーター、思考リーダー、コアメンバーの3種類に分類を行った。このうち筆者はコミュニティのオーガナイザーとして運営全体に関わり、私立大学教員のA氏がアドバイザーとしてコミュニティ運営の支援と思考リーダーとして活動することに再設計した。その他のメンバーはコアメンバーとして位置付けて、大学設置認可を含む大学教育の質保証に関する経験的なナレッジの発表、共有等を行う位置付けとした。

役割分担はコミュニティ創設当初から各自の得意分野等を踏まえて行われていたが、設計テンプレートに基づいて自分が何の役割を担うのかを具体化した。

- コーディネーター：筆者と私立大学教員のA氏
- 思考リーダー：筆者と私立大学教員のA氏
- コアメンバー：筆者と私立大学職員のB氏、国立大学職員のD氏、公立大学職員のC氏

(4) 結託段階における基本計画

設計テンプレートの作成にあたって、最も注力したのは当該項目である。J-QA研究会が目指す目標などを具体的に記述した。特に知識の共有が役立つことを立証する方策では、J-QA研究会の主目的とも言うべき、現行の大学設置認可制度における問題点及び改善点を踏まえ、コアメンバーを含む現場の職員からの解決策の提案となるよう、思考リーダー同士での意見交換を重ねた。

併せて本専攻の特別研究における指導教員からのアドバイスも取り入れ、J-QA研究会の取り組むべき課題や社会的意義について、検討した結果を盛り込んだ。

- 知識の共有が役立つことを立証する方策：蓄積した質的データをナレッジ・マネジメントで共有化・提供すると「個人と組織の経験に依拠した状態」から「大学を越えて担当者が経験を共有し、申請大学と文部科学省にとっても効果・効率・魅力に基づく好循環が発生する状態」に改善。
- メンバー間の信頼関係を強固にする方策：メンバー間の「困った」をインフォーマル学習で解決。
- 知識共有プロセスの具体的な方策：大学設置認可申請に関わる質的データを共有化、Slack, Zoom での打ち合わせ記録をデータ化（動画、テキスト）。
- キックオフのアプローチ：2020 年 9 月にコアメンバーでキックオフ済。
- 定期活動：月 1 回の Zoom ミーティング（質保証関連テーマを設定）
- コミュニティの空間（現実空間とソーシャルメディア）：Slack と Zoom を併用して実施。コロナ禍が終息したら対面でも。

5.2. 副次的効果としてのナレッジ生成

筆者は J-QA 研究会で、大学設置認可制度をテーマとして扱っている。2021 年 5 月 28 日に J-QA 研究会の実践コミュニティ化に向けたディスカッションをメンバー間で行った際、業務遂行上の重要なツールである設置の手引を読み解くため、ナレッジの生成と持続的な共有化が有用との結論に達した。

そこで、筆者が[資料 5「大学等の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方](#)（以下「手引の読み方」という。）のプロトタイプを Google ドキュメントで開発してメンバーに共有した。編集作業の効率性を高めるため、プロトタイプ of 編集は筆者が単独で行うこととし、コメント機能を活用してメンバーからの改善意見を踏まえて改訂を実施した。手引の読み方の開発を設計した段階から、広くナレッジを共有することを目的としていたため、プロトタイプは誰でも閲覧できる「オープンアクセス」方式を採用することとした。オープンアクセスを可能とするため、リンクを知っているインターネット上の全員が閲覧できるように設定した。

また、Slack 上でメンバーが大学設置認可に係る業務上の課題や疑問点等がある場合、相互に確認して意見交換を行うチャンネルを設定し、これを「設置駆け込み寺」と名付けた。これは J-QA 研究会でメンバー間の意見交換を重ねた際、各自が最初に大学設置認可申請を担当した際、何から手を付ければ良いのか分からない状態であったため、その

時の疑問点等は今後新たに大学設置認可申請を担当する者が同じ疑問点にぶつかった場合の解決策としてナレッジを蓄積することに意義があるのではないか、というメンバーからの発案に基づくものである。

メンバーから寄せられる質問に対しては、Slack 上で気づいたメンバーが返信する形式を採用したが、大学設置基準の解釈や大学設置認可申請での実務的な取扱いなど、実践コミュニティで扱うに相応しいナレッジが蓄積されていった。「設置駆け込み寺」での質問と回答は、設計テンプレートの「結託段階における基本計画」で記述した「蓄積した質的データをナレッジ・マネジメントで共有化・提供すると「個人と組織の経験に依拠した状態」から「大学を越えて担当者が経験を共有し、申請大学と文部科学省にとっても効果・効率・魅力に基づく好循環が発生する状態」に改善。」することへの一歩になると思われるため、メンバーが質問をしやすいように応答の反応を迅速にしつつ、回答の明示的根拠を示すことを心かけた。また、「設置駆け込み寺」では個別大学の具体的な課題等が開示されるため、有益なナレッジではあるが文脈依存的な内容や個別大学の特定に繋がりうる情報はマスキングを行った上で、手引の読み方に順次反映させた。

設計テンプレートによって、J-QA 研究会の目的・目標が明確化され、メンバー間の意見交換が促進されたことに伴い、手引の読み方の開発と継続的な改訂に繋がった。また、これらの取組みについては、清水（2018）が指摘する創発的行動に該当するものと筆者は理解し、コミュニティ運営を活性化させるためには生成したナレッジを公開して改善とフィードバックを受けることが必要であると解釈した。

以上の理由から、筆者が 2021 年 8 月 27 日（金）にオンライン実施となった SPOD フォーラム 2021 [「大学設置認可申請入門」](#) で講師を務めた際、受講者にナレッジを提示した。併せて受講後に改善や利用促進に向けたアンケートを実施した。

また、筆者の researchmap の「Works(作品等)」にリンクとして公開し、ナレッジの保持が行えるようにした。

第6章 実験評価

設計テンプレートによるコミュニティの再設計についての効果を検証するため、J-QA研究会のメンバー4名に対して、半構造化インタビューを実施した。

実施期間は2022年1月18日から23日までの間、対象者1名ずつ個別にZoomで実施した。インタビューにあたり、[資料2「質的調査の協力依頼」](#)と[資料3「質的調査の協力者への同意書」](#)を事前に送付し、同意を得てからインタビューを実施した。

インタビューでは設計テンプレートによる再設計前後の変化を確認するため、事前に[資料1.2.「J-QA研究会の実践コミュニティ設計テンプレート」](#)を対象者に送付し、インタビューとインタビュアーが同じ資料を参照しながらインタビューを進める形式を採用した。実施した日時は以下のとおりである。

- A氏（私立大学教員） ※思考リーダー、コーディネーター
 - 2022年1月20日（木）19時00分～20時30分
- B氏（私立大学職員） ※コアメンバー
 - 2022年1月22日（土）19時00分～20時15分
- C氏（国立大学職員） ※コアメンバー
 - 2022年1月18日（火）19時20分～20時45分
- D氏（公立大学職員） ※コアメンバー
 - 2022年1月21日（金）20時00分～21時20分

第7章 考察

7.1. 半構造インタビューの分析

半構造化インタビューでは、[資料4「実践コミュニティ設計テンプレートの適用前後の変化に関するインタビュー項目」](#)に沿って Zoom でインタビューを実施し、レコーディングデータを取得した。

実施したインタビューのレコーディングデータを Amazon Transcribe でテキスト生成を行い、逐語録を作成した。質問事項に対する逐語録の回答を分析し、設計テンプレート適用前後の比較を通じて、テンプレートの有用性についての評価を行った。逐語録から抽出したインタビュー項目への回答は下表に示す。

表2 逐語録から抽出したテンプレートへのコメント

インタビュー項目	インタビュー어의回答抜粋
テンプレート適用による研究会の変化	・ J-QA 研究会のコンセプトが明らかになり、自分の知識の向上が意識できた。 ・ 全体を俯瞰することができるようになった。
再設計後のコミュニティの成長度	・ 目的が付与されてコミュニティが成長した。 ・ テンプレートで再設計したことによって、研究会の性格・信頼性がある程度保持できた。
自分自身が成長した実感	・ コミュニティ内での発表や意見交換などを通じて、考え方、調べ方などが訓練されたと思う。 ・ コミュニティ内での相互学習を通じて、設置認可申請業務の経験についてメンバーのインタビュー調査を行い、個人で大学教育学会のポスター発表を質的研究で出すことができた。
「知識の共有が役立つことを立証する方策」の達成度	・ 「設置の手引の読み方」を明文化し、改訂を行う中でメンバー間の相互学習が促進されたことで、コミュニティとして達成できている。 ・ 大学設置認可制度に関するナレッジベースのコミュニティができたと思う。

インタビュー項目	インタビューの回答抜粋
「メンバー間の信頼関係を強固にする方策」の達成度	・ 経験に基づく解釈や事例による質の良い「経験に基づく回答」が得られる。 ・ 信頼関係があるので安心して聞ける。
「知識共有プロセスの具体的な方策」の達成度	・ Zoom のレコーディングデータを Amazon Transcribe でテキスト化しており、動画と合わせて知識が共有されるので、後で確認等が行いやすい。 ・ 反面、Slack は情報の網羅性と検索性に若干難があると感じられるので、これまでコミュニティで知識共有してきたナレッジは一度棚卸しが必要だと思う。
「解決すべき組織の問題」の達成度	・ J-QA 研究会は大学横断型のコミュニティなので、ある程度達成できていると思うが、これから入りたいと思う人への情報提供など、もう少しオープン化を検討しても良いと思う。 ・ J-QA 研究会のメンバー以外で、現在設置認可申請に携わっている人からの質問や疑問などの意見を拾い上げる仕組みが作れるといい。 ・ 大学横断型のコミュニティは構築できたが、メンバーの属性と経験から理系の学部等設置、国立大学法人における設置手続の分野が強化できるといい。
コミュニティの意義の達成度	・ 設置認可に対する考え方やエッセンスなどは、手引の読み方の開発を通じて共有化できている。
コミュニティが組織にもたらす価値の達成度	・ 大学設置認可制度の勘所、非認知能力、直感的能力など他者の経験から学ぶことができることには価値がある。 ・ 他のメンバーが大学設置認可や認証評価で得た知識の使い方を他の業務に転用していることを知ることができたので、価値は高いと思う。

インタビュー項目	インタビュー어의回答抜粋
成長を実感できるような継続的なコミュニティの運用の達成度	・ 設計テンプレートで J-QA 研究会のあり方を明文化することができて、「立ち帰る場所」ができた。 ・ 大学職員の勉強会等は立ち上げから数年で続かないことも多いが、コミュニティの意義、発展するための基盤ができるのは大きい。

対象者 4 名にインタビューを実施した結果として、設計テンプレートを用いて J-QA 研究会を実践コミュニティに再設計した結果、コミュニティの目標が整理されたこと、手引の読み方をナレッジとして生成し、改訂を行うことができたなどの意見を確認することができた。特にメンバー間の相互で学習が促進されている点を確認できたことは、設計テンプレートの有用性を強調することができると思われる。

以上の理由から、実践コミュニティ設計テンプレートの作成過程において、明文化されたコミュニティの目標等を議論した結果、行うべき目標・メンバー間の役割が整理され、発展の初期段階ではあるが、正統な実践コミュニティへの転換を行うことができた。副次的効果として「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方を解説するナレッジを生成・公表し、再設計後のコミュニティにより、参加者がナレッジの生成と改訂を繰り返しながら成長を実感できるような継続的なコミュニティの運用が可能となった。

7.2. 今後の展望と課題

設計テンプレートによる実践コミュニティ設計の有用性は本研究において確認できた。

本研究の今後の展望としては、権藤,合田（2013）の研究の射程では、テンプレートの対象範囲としては初期段階に設定されていたため、成熟段階におけるテンプレートの開発が望まれる点である。清水（2018）の先行研究における創発的行動と組織的設計の連鎖がオンラインコミュニティの駆動を促進することを踏まえ、成熟段階におけるテンプレートの開発が今後の実践コミュニティにおける課題であると考えられる。半構造化インタビューの実施によって、現在の J-QA 研究会に不足する点として、理系学部の設置手続や国立大学法人の設置手続きなどを今後のコミュニティ活動の射程に含めるべきとの課題を明らかにすることができたため、その改善点を踏まえて実践コミュニティの発展の成熟段階に移行させるかが今後の課題である。

また、本研究の課題として **J-QA** 研究会の立ち上げにあたっては、筆者と私立大学教員の **A** 氏との間でメンバー編成について協議し、熟慮して予めコミュニティ運営が容易になると思われるメンバーを選定して実施した。このことも、**Wenger et al. (2002)** の指摘する実践コミュニティ育成の 7 つの原則に合致したことが **J-QA** 研究会の実践コミュニティ化に寄与したと考えられる。以上の理由から、設計テンプレートの作成にあたっては、現職の大学教員である **A** 氏によるアドバイスが大きくコミュニティ設計に貢献したことを踏まえると、設計テンプレートの作成時に思考リーダーの支援有無がコミュニティの成否に影響することが考えられる。思考リーダーの有無が実践コミュニティの構築にあたっての大きな課題である。

この課題に対して、思考リーダーがいない場合のテンプレート作成段階での支援方策について、検討を要すると考えられる。**長田 et al. (2021)** のパターン・ランゲージ開発などの先行研究もあることから、本研究とは別の視点からのアプローチなども折衷的に取り入れることが効果的と思われる。

上述した展望と課題は相互に関係しているため、筆者としては本専攻の修了後にも継続して取り組むべき研究課題だと認識している。

参考文献

- Etienne Wenger, Richard McDermott, William M. Snyder (2002) コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践.翔泳社
- 権藤俊彦・合田美子 (2013) 実践コミュニティの設計を支援するテンプレートの開発.教育システム情報学会第 38 回全国大会(金沢大学)発表論文集:115-116
- 井上史子・安岡高志・小笠原正明・三尾忠男・大串晃弘 (2021) SoTL における「実践コミュニティ」の意義と役割を考える.大学教育学会誌,43 (2) ,104-108
- 長田尚子・デイヴィス恵美・神崎秀嗣・町田小織・高尾郁子・田中浩朗 (2021) 越境的教育実践コミュニティにおけるパターン・ランゲージ開発の試み.日本教育工学会研究報告集,2021 (4) 33-40
- 清水たくみ (2018) ヘルスケア・オンラインコミュニティにおける組織設計と創発.組織学会大会論文集,7 (2) ,7-12
- 松本雄一 (2018) 実践共同体構築による学習促進の事例研究－非規範的視点と越境を中心に－.日本経営学会誌,41,52-63
- 松本雄一 (2019) 実践共同体の学習.白桃書房

添付資料

資料 1.1. 実践コミュニティ設計テンプレート

実践コミュニティ設計テンプレート	
基本情報とコンセプト	メンバー
■ コミュニティ名 ■ 領域 ■ テーマ ■ 分類 □ 助け合い/ベスト・プラクティス/知識の世話人/イノベーション ■ 活動範囲	■ コーディネーター ■ コアメンバー ■ 思考リーダー
組織内コミュニティ設立の場合の提案資料	結託段階における基本計画
■ 解決すべき組織の問題 ■ コミュニティの意義 ■ このコミュニティが組織にもたらす価値 ■ 支援すべき根拠	■ 知識の共有が役立つことを立証する方策 ■ メンバー間の信頼関係を強固にする方策 ■ 知識共有プロセスの具体的な方策 ■ キックオフのアプローチ ■ 定期活動 ■ コミュニティの空間（現実空間とソーシャルメディア）

資料 1.2. J-QA 研究会の実践コミュニティ設計テンプレート

実践コミュニティ設計テンプレート	
基本情報とコンセプト	メンバー
■ コミュニティ名 □ J-QA研究会 ■ 領域 □ 教育学分野のうち、高等教育分野で、大学教育実践に関わる領域 ■ テーマ □ 日本の大学教育の質保証システム（大学設置認可制度、認証評価、内部質保証）※メンバー間の得意分野で分担 ■ 分類 □ <u>（助け合い）</u>ベスト・プラクティス/<u>（知識の世話人）</u>イノベーション ■ 活動範囲 □ 設置認可申請、認証評価、内部質保証の担当経験がある大学職員	■ コーディネーター □ 長山琢磨、私立大学教員A氏 ■ コアメンバー □ 長山琢磨、私立大学職員B氏、国立大学職員C氏、公立大学職員D氏 ■ 思考リーダー □ 長山琢磨、私立大学教員A氏
組織内コミュニティ設立の場合の提案資料	結託段階における基本計画
※J-QA研究会は組織横断的コミュニティなので、高等教育界全般を指す ■ 解決すべき組織の問題 □ 横断的ネットワークが存在しない大学設置認可申請担当者のコミュニティを創設し、各大学に閉じているナレッジを共有化する。 ■ コミュニティの意義 □ 大学設置認可申請の経験・スキルを実践コミュニティで大学横断的に共有化 ■ このコミュニティが組織にもたらす価値 □ 前任者や大学設置コンサルティング業者などからしか得られなかった「経験しないと分からない」大学設置認可申請の業務について、他大学での経験を持ち寄った職員間で率直な意見交換ができる。 ■ 支援すべき根拠 □ 各大学で閉じている設置認可申請業務のナレッジを共有化することにより、申請者と審査側の事務的負担を軽減し、真に教育の質保証に繋がる時間を確保する。	■ 知識の共有が役立つことを立証する方策 □ 蓄積した質的データをナレッジ・マネジメントで共有化・提供する と「個人と組織の経験に依拠した状態」から「大学を越えて担当者 が経験を共有し、申請大学と文部科学省にとっても効果・効率・魅 力に基づく好循環が発生する状態」に改善。 ■ メンバー間の信頼関係を強固にする方策 □ メンバー間の「困った」をインフォーマル学習で解決。 ■ 知識共有プロセスの具体的な方策 □ 大学設置認可申請に関わる質的データを共有化 □ Slack, Zoomでの打ち合わせ記録をデータ化（動画、テキスト） ■ キックオフのアプローチ □ 2020年9月にコアメンバーでキックオフ済。 ■ 定期活動 □ 月1回のZoomミーティング（質保証関連テーマを設定） ■ コミュニティの空間（現実空間とソーシャルメディア） □ SlackとZoomを併用して実施。コロナ禍が終息したら対面でも。

資料2 質的調査の協力依頼

修士論文の質的調査に関する協力のお願い

熊本大学大学院社会文化科学教育部
教授システム学専攻博士前期課程2年
長山 琢磨 (200G8811)

1. 研究の意義と目的

榎藤, 合田 (2013) で提案された「実践コミュニティ設計テンプレート」について、大学教職員で構成する大学教育の質保証を扱う「J-QA 研究会」に対して適用した効果検証を行うものです。

本研究の意義は、正統的な実践コミュニティを設計するためのテンプレートの効果を確認し、テンプレートの活用によって再設計されたコミュニティが継続的な学習に繋がったかを目的としています。

【論文の題目】

「実践コミュニティ設計テンプレートによる継続的な学習コミュニティ運用の再設計」

2. データ収集の時期と方法

2022 年 1 月上旬～中旬の時期にインタビューを実施します。Zoom を利用し、インタビュー中は録画します。時間は 30 分～1 時間程度で、1 名につき 1 回行います。

3. 研究成果の公表

本研究の成果は研究者の修士論文作成にあたって使用させていただきます。その他、(1) 学会又は研究会のシンポジウム、口頭発表、ポスター発表等 (2) 学会誌や紀陽、広報誌等への寄稿などで公表することが想定されます。発表や原稿においては、すべての固有名を変更し、個人が特定できないようにします。

4. 個人情報の保護とデータの取扱い

収集したデータは、研究・教育・学術目的以外には使用しません。個人情報を保護するため、データ上のお名前は研究担当者が取り除き、分析時には匿名化して厳重に管理します。

5. 研究者の氏名と連絡先

氏 名 長山 琢磨 (ながやま たくま)
連絡先 tnagayama@st.gsis.kumamoto-u.ac.jp
電 話 ***-****-****

以上

資料3 質的調査の協力者への同意書

修士論文の質的調査に関する協力への同意書

熊本大学大学院社会文化科学教育部
教授システム学専攻博士前期課程2年
長山 琢磨 (200G8811) 行

私は、長山琢磨が実施する「修士論文の質的調査」に関して、別紙「修士論文の質的調査に関する協力をお願い」の文書を確認し、下記項目の説明を受けました。

1. 研究の意義と目的
2. データ収集の時期と方法
3. 研究成果の公表
4. 個人情報の保護とデータの取扱い
5. 研究者の氏名と連絡先

上記内容を理解し、本件の研究協力に同意します。

年 月 日

(氏名) _____

研究担当者

(氏名) 長 山 琢 磨 _____

資料4 実践コミュニティ設計テンプレートの適用前後の変化に関するインタビュー項目

1. 対象者（4名）

- ・ A氏（私立大学教員） ※思考リーダー、コーディネーター
- ・ B氏（私立大学職員） ※コアメンバー
- ・ C氏（国立大学職員） ※コアメンバー
- ・ D氏（公立大学職員） ※コアメンバー

2. 導入部

「実践コミュニティ設計テンプレート」は Wenger の5段階（①潜在、②結託、③成熟、④維持・向上、⑤変容）のうち、①～②を初期段階、③～⑤を成熟段階と分類しており、初期段階のコミュニティ設計を目的としています。

J-QA 研究会は 2020 年 9 月からスタートし、月 1 回ペースでテーマを決めて、大学教育の質保証についての議論を行ってきました。2021 年 5 月 28 日の研究会で、筆者から「実践コミュニティ設計テンプレート」に基づく提案を行い、メンバーの了承を得てコミュニティの再設計を行いました。

再設計後、大学設置認可申請のナレッジ生成と改訂を行ってきましたが、本インタビューでは、再設計前後のコミュニティの変化についてお伺いします。

3. 質問事項

- （1）テンプレートの適用によって、J-QA 研究会が変化したと思うか？
 - ・ 変化したと思う場合、どのように変わったと感じるか？
 - ・ 継続的な学習を促すコミュニティに変化したと感じるか？
 - ・ テンプレートで明文化されたコミュニティの目標等を議論した結果、目標・メンバー間の役割が整理されたと感じるか？
- （2）設計テンプレートによる再設計後、コミュニティ自体は成長したと感じるか？
 - ・ 具体的に何が変わったと感じるか？
 - ・ 継続的な学習コミュニティになったと感じるか？
- （3）J-QA 研究会を通じた実践コミュニティへの参画によって、自分自身が成長した実感はあるか？
 - ・ 成長を感じるエピソードはあるか？
- （4）「結託段階における基本計画」で掲げた「知識の共有が役立つことを立証する方策」は達成できていると感じるか？

蓄積した質的データをナレッジ・マネジメントで共有化・提供すると「個人と組織の経験に依拠した状態」から「大学を越えて担当者が経験を共有し、申請大学と文部科学省にとっても効果・効率・魅力に基づく好循環が発生する状態」に改善。

- ・ コミュニティ再設計によって、「大学を越えて担当者が経験を共有し、申請大学と文部科学省にとっても効果・効率・魅力に基づく好循環が発生する状態」を目標としたことが、現時点で目標に近づいていると感じるか？

- (5) 「結託段階における基本計画」で掲げた「メンバー間の信頼関係を強固にする方策」は達成できていると感じるか？

メンバー間の「困った」をインフォーマル学習で解決。

- ・インフォーマル学習の機会として、Slack 上での「設置駆け込み寺（各メンバーが疑問点を相互に共有し、解決策を探求する仕組み）」は役立ったか？

- (6) 「結託段階における基本計画」で掲げた「知識共有プロセスの具体的な方策」は達成されているか？

大学設置認可申請に関わる質的データを共有化

Slack, Zoom での打ち合わせ記録をデータ化（動画、テキスト）

- ・知識共有プロセスには満足できたか？
- ・再設計の前後で変化は感じたか？

- (7) 「組織内コミュニティ設立の場合の提案資料」で掲げた「解決すべき組織の問題」は達成されていると感じるか？

横断的ネットワークが存在しない大学設置認可申請担当者のコミュニティを創設し、各大学に閉じているナレッジを共有化する。

- ・現時点ではメンバーを限定したコミュニティ運営であるため、横断的コミュニティには至っていないが、今後何が必要だと感じるか？

- (8) 「組織内コミュニティ設立の場合の提案資料」で掲げたコミュニティの意義は達成されていると感じるか？

大学設置認可申請の経験・スキルを実践コミュニティで大学横断的に共有化

- ・コミュニティの再設計後に「[「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方](#)」を生成し、メンバー間の経験と知識に基づいて改訂を繰り返したが、このことによってコミュニティの意義は達成されていると感じるか？

- (9) 「組織内コミュニティ設立の場合の提案資料」で掲げたコミュニティが組織にもたらす価値は達成されていると感じるか？

前任者や大学設置コンサルティング業者などからしか得られなかった「経験しないと分からない」大学設置認可申請の業務について、他大学での経験を持ち寄った職員間で率直な意見交換ができる。

- ・経験的なナレッジの共有化に、本コミュニティは役立つと感じるか？
- ・参加者がナレッジの生成と改訂を繰り返しながら成長を実感できるような継続的なコミュニティの運用が可能となったと感じるか？

以上

資料5 「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方

- 長山琢磨 et al. (2021) 「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方
https://docs.google.com/document/d/1KaBFethYmICkalUfJYGxTF6Ffc_17gduiaa-yFWJb4k/edit#heading=h.wz4e57nnbimr (参照日 2022.01.05)

「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」の読み方

概要：以下の項目について、[設置手引（令和5年度開設用）](#)のページ数で説明

作成者：J-QA研究会（作成代表者：長山琢磨）

作成日：2021/06/01（2021/12/17更新）

[問い合わせ用Googleフォーム](#)

【FAQ】

- [届出による学部等の設置を考えています。文部科学省の手引には「届出の際には事前相談に諮ることを推奨します。」とあります。他大学の事前相談書類で参考になる資料はありますか？](#)
- [他大学の設置認可申請書類などは参照できるでしょうか？](#)
- [「学位の分野」と「学位名称」の違いがよく分かりません。両者の違いを分かりやすく解説した資料などはあるでしょうか？](#)
- [「認可」と「届出」は何が違うのでしょうか？](#)
- [「定款」と「寄附行為」は何が違うのでしょうか？](#)
- [事務職員として設置認可申請を担当することになりました。開設までの間に何を準備したらいいでしょうか？](#)
- [設置申請にあたって「学生の確保の見通し等を記載した書類」を作成する必要があります。自大学で調査を行うにはマンパワーが足りないので、外部業者に委託することはできるでしょうか？](#)
- [認可申請では専任教員の「教員個人調書」が必要だと聞きました。教員資格審査のために個人調書をチェックするポイントはあるのでしょうか？](#)
- [大学設置認可制度では、国公立大学で手続きの違いはあるのでしょうか？](#)
- [設置認可申請書類は多くの書類を作成する必要がありますが、書類別の作成順序などはあるのでしょうか？](#)
- [大学設置認可申請の際に、必要な校地・校舎面積はどのように計算したら良いのでしょうか？](#)
- [2020年度から設置認可申請書をPDFでデータ提出することになりました。データ作成上の留意点などはあるのでしょうか？](#)
- [設置後に「設置計画履行状況等調査」があると聞きました。具体的にどのようなことが調査されるのでしょうか？](#)

謝辞

本研究では、大学教育の質保証システムを対象として立ち上げた J-QA 研究会を実践コミュニティ設計テンプレートに基づき、継続的な学習コミュニティ運用の再設計を行うことを目的とした。

修士論文を書くにあたって、主指導の合田美子先生には課題提出の遅れで大変ご迷惑をお掛けしつつ、暖かくかつ的確に指導して下さったことに感謝を申し上げたい。また、副指導の鈴木克明先生と喜多敏博先生からは中間審査等を通じて、研究の精度を高める有益なアドバイスを頂戴したことに感謝を申し上げたい。

J-QA 研究会が発足した経緯として、筆者が 2019 年に SPOD フォーラムで講師を担当した「大学設置認可申請入門」がきっかけである。特に筆者を講師に推挙してくださり、その後も J-QA 研究会の立ち上げを一緒に行った上畠洋佑さんに感謝を申し上げたい。本研究を進めるにあたって、J-QA 研究会がなければ修士論文を書き上げることは不可能だった。改めて研究会メンバーの皆様に御礼を申し上げたい。

J-QA 研究会は筆者を含む 5 名で 2020 年 9 月にスタートした。現在は 6 名のメンバーで運営しているが、徐々にコミュニティを拡張させていきたいと考えている。本研究の成果と課題もコミュニティのメンバーに還元しつつ、継続的な学習に繋げたい。